

(一社) 東洋音楽学会東日本支部第 146 回定例研究会

江戸期吉原遊廓におけるはやり歌の研究
—随筆を通した《岡崎女郎衆》・見世すががきの歌・継節の考察—

青木 慧 (東京藝術大学大学院)

江戸期吉原遊廓は江戸社会における一大娯楽地である。しかし、度重なる火災や遊廓という場の特性による史料的制約から、吉原の音楽文化の多くは未解明である。筆者はこれまで、江戸期に成立した諸文学作品に研究余地を見出してきた。本論文は、約 180 点の随筆作品における記述から、吉原における音楽文化の一側面—《岡崎女郎衆》、見世すががきの歌、継節という 3 種のはやり歌の音楽的実態を明らかにするものである。

本論文第 1 部では、戯作である洒落本の分析に取り組んだ卒業・修士研究の総括を行うと同時に、博士研究への導入として、随筆における音楽情報の記述量や傾向に言及しながら、吉原に限らない国内での音楽文化の様相を確認し、江戸期邦楽界の全体像を捉え直した。第 2 部では、随筆においてとりわけ文人の興味関心が注がれた「はやり歌」に着眼し、吉原における「はやり歌」の中で最も多くの情報を得ることができた 3 種の事例の音楽的実態を、その展開や吉原への流入経緯と共に分析した。単純明快な歌詞と尺八/箏/三味線譜集の刊行普及に伴い、吉原において長期にわたる定番レパートリーとなった《岡崎女郎衆》、種目の流行状況と客層の変遷を受けて、はやり歌を取り入れながら奏楽形態を変化させた見世すががき、土手節に代表される複数の歌詞を組み合わせるという流行と、そこから生まれた歌を包括的に指す継節、こうした事例に見られるような、歌が営業戦略として利用され意図的に流行が作り出されるという構造は、吉原の音楽文化の独自性と言えよう。

はやり歌は、その誕生から終焉までを正確に辿ることは極めて困難であると考えられてきたが、吉原という場を観測定点とすることで、外部との関連から相対的に吉原内部の実態を解明することが可能となった。しかし、3 種の事例に今日の定説や認識との大きな齟齬が確認されたように、随筆をはじめとした、学術的価値が時に軽んじられる史料の分析不足は各分野において顕著であり、本論文が音楽学的研究及び幅広い史学研究に新たな視座を投じるものとなることを期待する。